

Title	武蔵野臺地に於ける水と[聚]落との關係
Author(s)	蘆田, 伊人
Citation	地球 (1926), 5(4): 341-347
Issue Date	1926-04-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183082
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

島の如く漁民全部が引き揚げて冬期無人の廢漁村と迄ならずとするも寒漁村となるの例は其の數甚尠しとせず。

更に眼を廣くして考ふれば裏日本の人は夏期には北海道或は樺太に向つて季節的移住をなし冬期に歸り來る者甚多し、輪島海士町の漁民が舳倉村に季節的移住をなすは之が縮圖として考ふれば敢て小孤島なりと雖も其の研究の結果は及ぼす範圍大なりといはざるべからず殊に延喜

の昔より漁夫の住む處となり今日に至る迄漁村としての使命は依然として異なるなしと雖も今後は單にそれを繼承する以外に利用の道なきか、沖合漁業盛んとなるにつれて其の避難港としての價值は勿論交通上或は軍事上の用途なきか少しく考究を要する問題なりとす。(大正十四年二月稿)

文獻 萬葉集 今昔物語 延喜式 特選神名牒 地質學雜誌
第二十卷第二百三十二號 輪島圖幅地質說明書 海士史
龍登の輪島

武藏野臺地に於ける水と聚落との關係

蘆 田 伊 人

「むさしのゝほりかねの井もあるものを、うれしくも水の近づきにけり」とは、千載集俊成の歌で、法華經の法師品の漸く濕土泥を見て、水の近きを知るの心を詠んだものであるが、その引合せに、武藏野の堀兼の井をだしたことは、

今茲に武藏野臺地に於ける水と聚落との關係を述ぶる余に取つては、一種云ふべからざる面白味を感ぜざるを得ない。武藏野臺地が古から水に渴望し、旅行者が水に憧がれた結果、逃水といふ一の幻象に接するが如き、又は掘ても掘ても水が出なかつたといふ所謂堀兼の井の傳説の如

き、いかに武藏野臺地と水とは其因縁が淺くないことを想はしむるではないか。そして夫れが水の極端な欠乏といふ感じを表現すると共に、武藏野といへば見渡す限りの廣野原で、全く聚落などは其中になかつたといふやうなことを思はしめる。然しこれは決して偽りではなかつた。俊成や其他の歌人が頻りに武藏野と詠じた平安朝の頃は勿論、室町時代の中葉までは全くかの北條氏康が「武藏野といづくをさして分けいらん、行くも歸るも果しなれば」と詠んだのも或る程度まで事實と見なければならなかつた。

人は初めは自然に征服されたが、漸々文明に進むに従ひ遂には自然を征服するものであることは、今更云ふまでもない。この嘗ては水に欠乏し家一つなかつた武藏野の臺地も、今は約十八萬九千九百の人口を集め、其密度に於ても畿内地方の北河内郡や南河内郡と同様で、攝津の三島郡や豊能郡とは遙かに濃厚である。この異常なる發展は果して何に原因したであらうか。凡そ人口が集中しそこに數多の聚落が発生し成

長するにはその原因はいくつもあるが、人類の生活に一日も須要欠くことの出来ない水を得るのに便利となつたことは、其最大原因の一として數ふるには恐らく何人も異存はあるまい。誰かの古歌に「旅人の行くかたがたにふみわけて、みちあまたある武藏野の原」とあるやうに、交通路は古から幾條もあつたであらうが、水に欠乏し乾き切つた廣野原で、いかに交通路が幾條もあつたからとて、今も變らぬ武藏野の空ら風に砂土を吹き卷かれては、到底人の住めるものではなかつたであらう。これ等の點より考へて余は武藏野臺地に於ける水と聚落との關係に就いて、聊か興味を感じたことであつた。そしてこの關係を述ぶるにあたり、これを地表の流水や涌泉を利用した第一期の時代と、人爲的に用水路を掘開して他の水を導き又は鑿井して地下水を利用するに至つた第二期の時代との二つに別けて見やう。

二

今地圖を展べて武藏野臺地の地形を通觀しそ

の第一期の時代に尤も適當であつたと見るべきは、第一は多摩川に沿ふた臺地南縁の地帯、第二は臺地の中央狹山丘陵の脚部を廻る地帯、第三は臺地の北西部金子村山添への地帯と、この三地帯を擧げるのであるが、その中臺地南縁の地帯は南に豊富なる多摩川の流水を控へ、且つ臺地と多摩川との間には丁度多摩川に依て作られた段丘の一部が、水田となすべき尤も良好な土地として残されてゐる。之に反して狹山地帯と金子村地帯とは地形上は何れも南に面し、丘陵の谷合ひから地下水の露出する泉などもあつて聚落を作るには誠に適當な位置ではあつたが惜しいかな當時農民の生活の基調をなす農業殊に水田を起すべき土地が少なかつたので、聚落は臺地南縁の地帯に比してその發生は餘程遅れたらしい。

平安朝の初期に於て臺地南縁の地帯には、其當時武藏一國の首府にして府廳の所在地たる國府即ち今の府中を中心とし、臺地の上には國分寺も建てられ、府中には總社をも祀られた。

武藏野臺地に於ける水と聚落との關係

そして臺地の南縁に沿ふて聚落は驚くべき程に發達してゐたものと思はれる。試みに和名抄所載の郷名の配置を見るのに、府中の西今の谷保村附近には小楊郷があつて、府中の東今の調布町近傍に新田郷と小島郷とがあつたらしい、狹江郷は尙其東で今の狹江村に當り、更らに其東玉川村は即ち勢多郷に當つてゐたやうである。かうして和名抄の多摩郡に屬する郷名のその武藏野臺地に所屬するものが、殆ど全部臺地の南縁にあるのを見ても、其發達の大抵は推測することが出来るが、これは全く多摩川の關係であつて、いかに多摩川の水の力の其の聚落發生に及ぼしたことの大きいことが知られる。

狹山地帯の西端に一の涌泉があつて箱の池といつた、古しへは四方十五町許もあつたと新編武藏風土記に見えてゐる、そしてその地は丁度地形の關係上古しへは入間郡廣瀬郷から入間川を渡り、多摩郡の小川郷または石津郷の方へ往來する交通路が狹山の丘陵をさけて通過する順路に當るので狹山地帯としてはこの附近が初め

て聚落を發生せしめた處と見られる。今の箱根ヶ崎村附近がそれであらう。延喜式所載の阿豆佐味天神の社は箱根ヶ崎の東十四・五町殿ヶ谷に、また出雲伊波比の神社が西北廿七・八町狹山の西北部に添ふた宮寺に在ることなどは自からこれ等を裏書するやうに思はれる。今の所澤町から南・北秋津村及久米川村附近はまた狹山丘陵の東端に當るので、北方兩毛地方から武藏の國府即ち府中を経て、相模の方へ往來する交通路の一要所であるが、天長十年五月に武藏國言、管内曠遠、行路多難、公私行旅、飢病者衆、仍於多磨入間兩郡界置悲田處、建屋五宇、云々と續日本後紀に見ゆる即ち悲田處を置いた地點が、丁度またこの秋津村にあるといふことから考へると、まだ其當時この附近にはさしたる聚落の發生してゐなかつたことを知ることができる。

之を要するに狹山地帯と臺地西北端の金子村の地帯との聚落は平安朝の末から所謂武藏七黨等の武藏武士の祖先が地形を利用して占據するやうになり、漸く聚落發生の素を立てた位のも

ので、臺地南縁の地帯とは比較にならなかつたらしい。

三

以上のやうな聚落の少ない寂しい狀況は、永くこの臺地を武藏野の原として人に知らしめ、江戸時代になつて漸くこゝにぼつ／＼聚落が出来るやうになつた。武藏野新田の開發が即ちそれで、その第一の原因は人も知る玉川上水と野火止用水との開鑿であつた。

玉川上水は西多摩郡羽村より多摩川の水を分岐して、丁度狹山地帯と臺地南縁の地帯との中間、臺地の上を東西に貫き今の東京市四谷の大木戸に通じたもので、これは承應元年時の江戸の町奉行神尾備前守の監督の下に江戸の住人で水利の事に精しかつた庄右衛門・清右衛門の二人に命じて開鑿せしめたものであつた。翌二年四月四日より工事を始めその十一月十五日迄に大木戸迄を掘り遂げたといはれ、其間約十有二里半、費用は金七千五百兩を要したと傳へられてゐる。それから年代の前後はあつたがこの上

水道を本流として左右に數條の分水道を開き、沿線開墾と灌漑とに供した。今分水道の主なるものを舉げると、拜島分水、中里新田分水、芝崎村分水、砂川村分水、小川村分水、榎戸新田分水、鈴木新田分水、國分寺分水、大岱新田分水、北野中新田分水、田無村分水、小金井村分水、關野新田分水、梶野新田分水、等で野火止用水も實はこの分水中の尤も大なるものの一つであつた。即ち砂川村八番の北小川村の境から玉川上水より分水し、新座郡野火止を経て新河岸川へ落ちるものであるが、之も承應二年玉川上水の開かるゝ時當時川越の領主であつた松平伊豆守信綱が幸に老中を勤めてゐたので、家臣の安松金右衛門に命じて開鑿せしめたものといはれてゐる。

斯の如く一時に水の豊富なる供給を受けた武藏野臺地は、もはや依然たる荒野として過ごすことは出来なかつた、且つ江戸幕府の開墾獎勵も手傳つて所謂武藏野新田が開かれ、従ふて多くの聚落を建設されるやうになり、遂に今日見るやうな約十九萬弱の人口を集中する基礎をこ

ゝに築いたのであつた。以上はこの臺地に於ける水と聚落との關係の第二期の時代であるが、凡そ吾人が水を得るの方法は常に河や水道より求めるばかりでなく、泉や井戸を利用することも古くから知つてゐた。井の頭池とか石神井の池とかは泉の尤も大なるものであるが、今少し小さなもので地下水が露出して泉をなすものが武藏野臺地に處々にあつた。國分寺にもあり、深大寺にもあり、牟禮にもあり、元狹山の二本木にもあり、藤澤村にもあり、其他探がせばまだ見出すであらうが、かうした水の利用は随分古くからあつたので自然其附近に寺や社が先づ建てられ、いつとはなしに其處に聚落が出来るやうになつたものも少しはあつたらしい。所澤町の西端に三ッ井戸弘法といふのがあつて、清冽な水が滾々と涌いてゐる、弘法大師に依つて發見されたと傳へてゐるが、これは各地に普通な傳説とし、この井戸から僅か隔つた同じく所澤町の田の屋の井戸は非常に深く約六十尺もあるといふことから考へると、三ッ井戸はやはり一

の涌泉であつたかも知れない、そしてこれを中心として一の聚落が発生し漸次交通路の關係から東の方へ推移して今の所澤町をなしたのではなからうか。

尙其外所謂井戸を掘つて地下水を得やうとしたことは勿論あつたが、この武藏野臺地は鑿井して水を得ることは尤も不適當な土地であつた。これは臺地を構成する地質に原因するものであるが地質上のことは今一切を省略する。掘兼の井の傳説も全くこれに依るのであるが、とにかくこの臺地に於て井戸を掘ることは非常に困難であつたらしい、左の二の文書は武藏野新田開發の際江戸幕府の援助を願ふた時の關係のものだが其間の消息を能く知ることが出来る。

乍恐以書付御願申上候

一大沼新田堀井之儀先達而貳ヶ所被仰付堀井出來仕、出百姓吞水差支無御座御救難有奉存候、併未水手長間不勝手之場所御座候、以御慈悲堀井之場所御見分被遊、願之通被爲仰付被下置候は難有奉存候以上。

寛保二年戊二月

大沼田新田 名主 彌左衛門

與頭 半次郎

川崎平右衛門様御下役衆中

乍恐以書付奉願上候

一先達面願上候通り井戸當春中被仰付被下候様ニ奉願上候、左候得ハ惣百姓相助難有奉存候以上、

戊三月十日

本多新田

名主 儀右衛門

組頭 仲右衛門

百姓代 五左衛門

川崎平右衛門様御役人衆中

(東京府民政史料)

斯様な次第であるから、この臺地で井戸を掘るには非常な費用がかかるので、貧弱な當時の水吞百姓では到底出來たことではなかつた。淺くて五十尺といふのでは、とても他の地方と比較にはならない、青梅町の東一里許丁度臺地の西端に位置する新町に櫻株といふ一軒の茶屋があるが、その井戸は正に百尺あるといはれて

ゐる。そして臺地に於ける礫層の厚さがいかに厚いかといふことは、臺地の人の諺に井戸一つ掘ればその礫で土藏一つの地形が出来るとさへ云はれてゐるのでも想像することが出来る。

四

以上のことから結論して見ると武藏野臺地に於ける水と聚落との關係は、その第一期の時代に於ては全く多摩川の水を利用して臺地南縁の地帯に聚落が發達し、第二期の時代はそれより降つて江戸時代になり玉川上水が開かれたので漸く臺地の中央部に聚落が出来た様になつたらしい。従つて其中間の時代に於ては僅かに涌出する泉や困難なる井戸によつて、要害なる地形を占據して其居住地を見出した所謂武藏武士の祖先や其遺族やまたは小田原北條氏並に甲州武田氏の滅亡後其浪人達などにより小さな聚落が建てられたのに過ぎなかつたと想像される。

さてかうした歴史的の觀察は今日でははや夢と過ぎ去つた。汽車や電車は縦横に走り水道も漸く布設されて、この臺地も全く水の欠乏や物

資の不自由を訴へないことになつた。田園都市や學園都市はこゝかしこに計畫される、その昔歌人共に恐れられた武藏野の原もその俵を消すのはもはや遠くはなからう。

○世界の人口

ヘーグの萬國統計院の計算に據ると一九二四年に於ける總計は十八億九千五百万である。一九一〇年には十六億二千万であつたが、この十四ケ年間の増加は無論各大陸一樣でない。其割合はアメリカは二五%九、アジアは二三%五で一番増加率が多きくアフリカは八%三である、然るにヨーロッパは移民の出てゆくこと戰亂の影響の爲めで増加率は僅かに三%三に過ぎない。左に一九二四年に於ける各大陸の人口と一方料の密度とを擧げると次の様である。

ヨーロッパ	四六二、二二七、〇〇〇 ^人	四八・二 ^人
アジア	一、〇六〇、二三八、〇〇〇	二四・三
アフリカ	一三七、三六一、〇〇〇	四・八
アメリカ	二二七、一三三、〇〇〇	五・二